

# 日蓮教団に於ける教化・伝道の考察

上 田 本 昌

## 一、序

教団に於ける宗教活動の中心が布教・伝道にあることは言うまでもないが、仏教の眼目たる正法、及び宗祖の説く究極安心の法門が誤りなく伝承され、それが大衆の中に活きたものとして顕現されていることにより、はじめてその意義が認められるものと言えるのである。特に現代に於て此のことが強く主張されるようになったのは、教団に於けるこうした宗教活動が、衰退して来た為であると考えられる。その原因としては、

- (1) 教団自体が戦後の経済的又は社会的変貌に依り、窮乏状態に墮したこと。(例えば農地開放等によって、農村寺院などの中には、維持経営の困難になったものが激増している。一方、都市の戦火にあった寺院は、その復興が遅々として進展しなかった。等の理由による。)
- (2) 従って、夥しい寺院・教会の数があながら、それらが落付いて布教・伝道の本来の活動が出来ず、その機能が停滞してしまい、専ら寺院自体の復興対策に急であつた。
- (3) 此のために、大衆の精神的依所となるにふさわしいものから、一步後退の止むなきに至り。
- (4) これに加えて、新興宗教々団の恐異的な跋扈と、

(5) 既成教団の大半が旧態依然とした「葬祭儀礼」のための仏教形式化と、千篇一律の布教・伝道方法にたよって  
いたため、現代人から益々遊離したものとなって行った。

これらがその主因として挙げられるのであるが、この外にも個々にわたって直接又は間接に種々の原因があったであろうことは言うまでもなからう。爰で問題となるのは、右の主因の中(3)(5)である。(1)(2)は時流変遷に依るものであり戦争の結果であつて後の(3)以下の前提となつてゐる。(4)は仏教が最も大切な大衆性Vを失ひかけた時に、その隙に乗じて起つたものであり、謂ば(3)(5)の皮肉な一現象として顯れたものであると言えよう。

そこで先ず(3)の問題から更に検討を加えて見るに、戦後既に二〇年近くを経過している今日に於て、未だに(1)の痛手から完全には癒えきらないでゐるが、然し、これは他のすべてが目覚ましい復興をしている現代にあつて、独り仏教だけが取り残されてゐるのは、大いに反省しなければならぬ所である。各自に新生の道を開拓して、(2)の段階を越え、更に(3)に於ける「大衆の精神的依所」としてふさわしいものとなり、本来の宗教活動が展開されて来なくてはならないであらう。真からの安心立命を求めて来る現代の大衆に対して、その求めに應ずることがもし不満足であつたとしたならば、その宗教の現代的意義が疑われて来るであらう。國際的不安と社会的恐怖或いは家庭的不和におのゝきを感じてゐる大衆は、何物かにすがらうとしてゐるのである。然しそれにもかゝらず大衆は、旧態依然たる既成仏教には、なかなか足をむけようとしたがらないのである。否むしろむけることが出来ないでゐると云つた方が當つてゐるかも知れない。ここに於て次の(5)がクローズ・アップされて来ることになるのである。

即ち、今日の仏教々団がと・も・す・と「葬祭儀礼」のためだけに限られて、その存在価値が認められる点に問題がある。勿論、教団が檀信徒の葬儀を行うこと自体が間違ひであると言うのでは決してない。ただそのみが寺院教会に

於ける宗教的機能の全部であるかの如くに思い、又はそのように見られる所にあやまりがあると言うのである。然らばその主たる機能はどこに在るのであるかと言うに、「教団の生命は布教にある。」と言われ、更に「現代は伝道活動をする者のみが生き残る時代である。」とも言われている通り、布教・伝道以外に教団の主たる使命はないと言つて敢て過言ではなからう。その心を持ってすれば或いは寺院に於て社会福祉の事業をやりながらも、或いは僧侶が公職・教職に就きながらも、或いは又葬祭儀礼を修しながらも、皆是れ広い意味に於ける布教・教化の一分野として考えられて来るのであるが、しかし此の外にも「寺院」を中心とした本来の直接又は間接の伝道方法が、同時に幾多山積していることを忘れるわけにはゆかないであらう。

然るに、既成教団の多くは、布教・伝道と言う時、先ず旧時代の布教法に依存し、これをたよりとして古来からの説教をもって、寺院に集る老齡層を対象としての「語り物」が大半を占め、且つ布教は専任又は常任の「布教師」に一任、と言う形をとるに至り、いよいよ一般から布教・伝道の関心がうすれて、現代人特に青年・壯年層から寺院自体が遠離してしまう結果となるに至ったものと見る事が出来よう。現代に於ける布教・伝道の問題点がこうした所にあることを先ず知って、その上で時機相応の教化方法を研究して行かなくてはならないであらう。

## 二、仏教に於ける教化・伝道の起源とその意義

そこで、教団に於ける教化・伝道、並びにそれらは現代に於て如何にあるべきか、と云う問題を究明するに當つて一応順序として、<sup>(1)</sup> 仏教に於ける教化・伝道の起源とその意義を考察してみよう。

先ず「仏伝」の上から仏陀の教化について見るに、仏が、ブツダガヤーで開悟されてから初転法輪のために、そこ

から約二百マイル程離れたベナレスに赴き、旧友たる五比丘らのために、郊外のサルナートにあるミガダーヤ（鹿野苑）で教えが説かれたのに始るのである。仏陀初期の教化は、五人の比丘を対象として、苦行を離れしめ「無上の安穩・安らぎ」を得せしむるために行われたのである。これを転機として一般の人々に救済のための教化が展開していったのであり、八十歳をもって入滅されるまでの間は、教化・伝道に他事なき生涯をすごされたのである。仏陀は常に多くの弟子をつれて、国内各地を巡回布教し、あらゆる階層の人々にわたって広く道を説いたのであり、これに依って仏教々団は急速に増大し、サンガ（僧伽）の構成員も逐次勢力をまして行ったのである。また仏陀の教化目標は自利・利他の両行を完成させんとする点にあり、仏の教化伝道は、従って単に法を伝達すると言うのみではなく、他を教化することに依って、更に悟を完成し法の意義を顕現する点にあり、故に仏教に於ける布教・伝道は、自己の悟が完成してから初めて行うと言うのではなく、一文一句なりとも自行の途上に於て、伝道することに依り、その中に自己の行が深められ、悟の完成へと導かれて行くことになるのである。此の点について日蓮聖人は、「我もいたし人をも教化候へ」と述べているが、爰に仏教に於ける布教・伝道の意義が藏されていると言えよう。

それでは、仏は如何なる方法を用いて布教・教化されたであろうか、と言う点について次に考えてみるに、その例は幾多見ることが出来るが、二三法華経の中から拾って見ると、先ず方便品の中に、

「如来は能く種々に分別し、巧みに諸の法を説き、言辞柔軟にして、衆の心を悦可せしむ。」<sup>(3)</sup>

とあり、これは仏徒としてその使命を果すべき布教者にとって、第一に留意しなければならない点であると言えよう。即ち、①種々分別とは聞法者の根性を能くわきまえ、そのレベルに従って、②諸の法を巧みに説き、布教の基礎

を誤まらないことである。此の布教の根本的立場にあって更に、③言辞柔軟にして徒らに固陋ならず、以って④大衆の心を悦可せしめ、無上の安心を与える所に、教化の大綱が在るものと言えよう。

そこで今度は、これをもう少し具体的な形で考えてみるに、同じく方便品の中で

「種々の因縁、種々の譬喩をもって、広く言教を演べ、無数の方便をもって、衆生を引導し、諸の著を離れしめたり。」<sup>(4)</sup>

とある如く、教化の方法は、極めて豊富であったことが知れうる。ここで因縁・譬喩と言うと、法華経所説の「三周説法」の方式が思い出されるであろう。即ち、上根には正説、中根には譬喩、下根のためには因縁を用いて、それぞれに領解せしむべく説かれた方法であり、如何に仏が教化の為に心を用いられていたかが知れるのである。又広い立場にあってあらゆる面から言教を演説し、無数の方便を駆使し、それに依って大衆をリードし、救済の為にあらゆる執著から離れしめたと言うのである。即ち、対機説法であり「随宜所説」であって、然も寿量品に依れば、

「常に法を説いて、無数億の衆生を教化す。」<sup>(5)</sup>

と言う周知の経文によってもわかる如く、そのすべては八衆生教化 $\vee$ にかけられていたのである。又更に阿舎の諸経典にみられる如く、初発心の弟子に対する教化は、極めて懇切であり、一対一の信仰・生活相談にまで及んでいるのである。法華経でも安樂行品には、新発意の菩薩に対する布教上の具体的な諸注意が示されている。

然して、天台では彼の五時八教の中で釈尊一代の説法儀式を分類し解説している。即ち「頓・漸・秘密・不定」の化儀の四教がそれであり、天台の説に依れば、釈尊は一切経を説くに当って、右の四つの方法を巧みに使用し、以て教化を円満ならしめたとするのである。前述の如く布教・伝道の意義が、単に法を弘めると言う一方的な形の上に現

れて来るものでないことは既に明らかであるが、自他共に「或いは主となり、或いは伴となって」同時に救済されようとする場合に於ては、互いに自己の宗教経験・信仰を相手に話し、それを納得領解せしめる所に大きな力を發揮するものである。此の他をして納得し領解せしめ、更に信の世界へ導入させる為には、当然のことながら其の方法に於て慎重であり、順序と工夫、或いは構成等の万全なる配慮が必要となつて来るのである。この配慮の現れの一つが化儀の四教であつて、「直頓」の後に「漸教」に於て教化の順序をもつた「次第説法」の形式をとり、「浅きより順次深きへ」従低向高の方法が採られるに至つたのである。これは仏が常に「機根を調える」と言う点に重きを置いていた現れであつて、華嚴から阿含・方等・般若を経て、法華に至るまでの間に、衆生の根性を円熟せしめようとされた、大きな配慮であつたと見ることが出来る。

こうした仏陀の伝道・教化の方法は、今日の布教を志す者にとつて、深く考慮し学ぶべき点の多いことを知らなければならぬであらう。仏徒として特に現代に活きた布教をなす上からも、此の根本的仏陀の在り方に注目し教化の基本を再確認しなければならないと思う。

【註】

- (1) 「ゴータマ・ブツダ」(中村元博士著) 参考
- (2) 昭和定本日蓮聖人遺文 七二九
- (3) 法華経方便品(大正九ノ一ノ五C)
- (4) 同 (同)
- (5) 同 寿量品(大正九ノ一ノ四三B)

三、日蓮聖人の教化・伝道とその特色



仏陀の教化方法とその意義についての一端を考察して来たのであるが、前項に於て述べたことの他に法華経では神力・囑累の二品を中心としてそのほかの諸品に見られる如く、「弘経」の功德甚大なることが随所に力説されている。またこれと同時に、勸持品に見られる如くその弘経伝道の至難たることも説かれている点を看過するわけにはゆかないであろう。

生涯を法華経の「如説修行」に当られた日蓮聖人は、此の幾多の至難に値われつゝも是れをのりこえてひたすら、「仏使」としての弘経伝道に尽力されたのである。爰で聖人の伝道とその特色を考えて見るに、嘗て釈尊がそうであった如く、聖人教化の源泉は大衆「救済の慈悲」から発し、「大難は四ヶ度小難は数知れず」と言う忍難弘経の生涯が、ここから展開して行ったものと云えるのである。

「日蓮は去建長五年癸丑四月二十八日より、今弘安三年太歲庚辰十二月にいたるまで二十八年が間、又他事なし。」<sup>(1)</sup>只妙

法蓮華経の七字五字を日本国の一切衆生の口に入とはげむ計也。此即母の赤子の口に乳を入とはげむ慈悲也。」<sup>(1)</sup>

此の一文に依って、その間の事状を知ることが出来よう。即ち立教開宗以来、聖人は直に鎌倉の大路に立ち、道往く人々を相手に「辻説法」をもって、大衆の中に直接とびこんで行かれたのである。当時の仏教界は、前代から栄えた真言・天台の貴族的仏教、並びに流行の浄土信仰の影響下にあったのであるが、聖人はこれに対して救済の為の弘経に、直接手段をもって当られたのであり、「理論から實際」へ、また「観念観法から色読体験」への実践が、布教活動の最も大きな特色の一つとなっているのである。しかも此の「色読」は、仏から与えられた本化仏使としての使命と自覚に燃え、聖人自身の全身命をかけての「献身性」をもったものであって、迫害重畳の生涯は、その現れとも言えるであろう。勸持品に示されている如く、幾回となく所を追われ、身の危険にさらされながら、「日本六十六箇国

嶋二の中に、一日片時も何れの所にすむべきやうもなし<sup>(2)</sup>と云う伝道は、全く他に例を見ることの出来ぬ程のものであり、「五尺に足らざる身を一つ置く処なく」と云う状態での布教には、「法華經の行者日蓮」としての不退な信が一貫して流れていたものと考えられうる。即ち貴重な宗教体験を通して「行者」としての（謂ば法華經弘通の実行者たる）自覚を得、更に本化仏使としての使命に挺身された所に、一代の教化に於ける源動力があったと見る事が出来るであらう。

「日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱へしが、二人三人百人と次第に唱へつたふるなり。未来も又しかるべし<sup>(3)</sup>」と云う伝道の基本は、右の如き自覚と慈悲、それに献身性を離れては考えられないものと言える。

次に、こうした聖人の基本的伝道態度の上に立って、どのような具体的方法が示されて行ったであらうか、と云う点について考察してみよう。

即ち、前述の鎌倉辻に於ける街頭布教によって、直接大衆とのつながりを求める一方、為政者に対しては彼の「立正安国論」を以って諫暁を行い、頭初より上下にわたっての教化が活潑に行われたのである。それは常に破邪折伏を主行とし、顕正摂受を伴行として行われ、時に摂折は「隨宜如実説」されており、方法・用い方は適切を失わなかった。又聖人の布教はいつも一対多の関係（謂ば街頭布教的方法）で行われたかの如くに思われがちであるが、そうした大獅子吼の反面には、一対一の関係、即ち弟子信徒の個々と膝を交え、信仰相談・面接説法の間答形式を採った場合も決して少なくなかった事と思われる。例えば佐渡時代に於ける阿仏房との対談、身延時代に於ける六老僧を中心とした各弟子・信徒との座談、等の中に諄々とした教化がなされたのであって、むしろこうした一対一の伝道方法



によって救済の成果が、より効果的に挙げられて行ったものとも考えられる。

聖人はまた門下に対して、伝道上最も留意すべき点を次の如く教示されている。

「夫仏法をひろめんとをもはんものは必ず五義を存して正法をひろむべし。五義とは一には教、二には機、三には時、四には国、五には仏法流布の前後なり。」<sup>(4)</sup>

此の五義については、既に周知の如くであるが、仏法を弘通し群生を利益せしめようとする者、即ち布教者にとっては必ず弁えねばならない基本問題である。こゝでは「仏法をひろめんとをもはんものは」と云っている点に特に注目してみたい。文の心は、思うに法を弘めようと発心した者は、と云う意味であって、そこには男女たると僧俗たるとを問はず、皆この五義を弁えよ、と云うのであって、「法師」とか或いは「僧」とか云う限定された言葉が使用されていない。つまりこれは僧は法を説く者、俗はこれを聞いて受入れる者、と云う一方的な型にはまった考えではなく「法を説く者」に於ては、僧俗共に「布教者」として認められているのであって、謂わば「今日の聞法者は明日の布教者」でなくてはならないと云うのが、最も望ましい在り方のように考えられるのである。聖人は「末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は男女をきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非すんば唱へがたき題目也。」<sup>(5)</sup>と述べておられるが、この場に於ては、既に男女・僧俗の差別は廃され、皆共に「地涌の菩薩」として、△弘法△の使命を帯た△本化△として昇華されているのである。従って、「お説教は布教僧に」と云う分業的考えではなく、説法者も聞法者も共に主伴となつて、「聞法した者は直に未聞の者へ向つて説法する」と云う有機的な態度でなくてはならない。即ち、僧俗一体となつて布教者となり、弘法活動するところに一天四海の理想実現が望めるのであって、布教の究極がそこに見出されるものと云えよう。こうした配慮をもつた聖人の言葉は、現代に於てよく味い検討すべきことであ

ると云えよう。

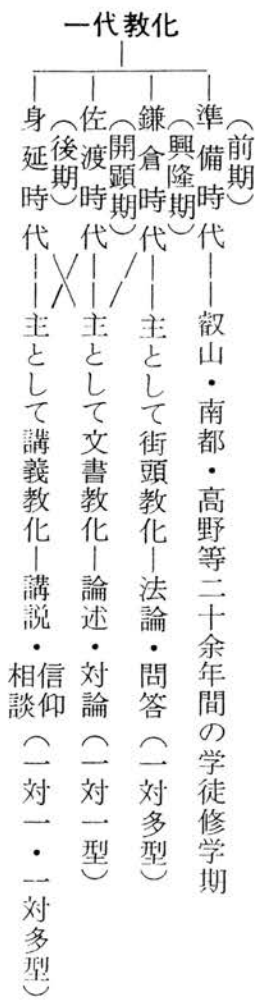
また聖人は、一切の行為の基本となるものを宗教に求め、その国に行はれている宗教の正邪に依って、国家・社会の平和と国民の安穩が、期待出来るか否かを判じている。即ち、すべての国民が安心を得、仏国土を実現する為には、一国の政治・経済・文化・その他あらゆるものの根底となる宗教が、如何にしても正統なものでなくてはならない。基礎が正常でなければ、その上にどのようなものを建てても完成しないのと同様である。こうした観点に立つた聖人は、大衆を救い国土を安泰たらしむる為、正法伝道の仏使として、新しい信仰活動の先頭に立ち、指導教化をされたのである。

然し、こうした聖人の伝道活動の裏面には、聖人自身が正法・正信を得るための二十余年間にわたる学徒修学時代の止暇断眠を看過するわけにはゆかない。今日の伝道者にとってこの点は特に強くかえり見られなければならない点であると思う。即ち、修学が伝道することの第一歩であるとも云えよう。教化の要諦は、先ず教化者自体が分に応じその教法に就いて、充分な理解と勝劣浅深を識別出来る智眼を備えていなくてはならない。聖人が求道の頭初に「日本第一の智者となし給え」と立願せられたのも、その根本はこうした教化の為のものであったと考えられよう。

これを要するに聖人の伝道は、大衆に正信を、国家に平安を、と云うモットーを掲げ、この唯一にして究極の目的達成に向って、献身的活動をすゝめられたのである。聖人の伝道は、最初から極めて活潑で、折伏の大獅子吼であったとされているが、当時の流行を極めていた宗教、即ち往生信仰が厭世的であったのに対し、現実肯定の宗教を打出して、新しい信仰から新しい生き方を導き出そうとされたものである。謂わば聖人の布教伝道は、いままで我国に流布したことのない新しく、しかも最も正常な信仰をもって、新しい人間関係を組織し、混乱不安の社会国家をして

平安なものに新生せしめようとされた所に、その大きな特色が在ったのであって、単なる自己の宗教宣伝の為のみのものではなかったのである。つまり聖人は『自他共に現実に即して、そのまゝの姿で救はれてゆこう』と云うのであって、此の現身に即して仏身を成就してゆこうとする行き方は、全く当時としては新しい人間社会を作り上げてゆくことを意味するものであり、従来の信仰の中からはとうてい考えの出でこないものであると云えよう。こうして、聖人は仏教に於ける現実的意義を把握し、此の土に仏国土を建設しようとしたのであって、その根底となる新しい正法の伝道に身命をかけられたのである。「日蓮が命を捨てたる」と云う献身的伝道と、「現実に即して、自他共に救済される」と云う点に、聖人の伝道に於ける最も大きな特色があったものと云えよう。

換言すれば、聖人は法華経によって生き、法華経によって新時代（末法）の宗教を立て、現実に生き甲斐のある人生を送る為の信仰を樹立しようと目されたのであって、それをへ自ら信じ、人をして信ぜしめるために伝道の生涯が展開されて行ったものとみることが出来る。聖人の伝道はこうして画期的に、日本の国家社会全体に、新しい夜明けを告げしめたものであると思うのである。



【註】  
 (1) 昭和定本日蓮聖人遺文 一、八四四頁

(2)	同	一、二七三頁
(3)	同	七二七頁
(4)	同	二六三頁
(5)	同	七二六頁

#### 四、日蓮教団に於ける教化・伝道

前章に於て一応、日蓮聖人の教化活動を考察したのであるが、勿論まだ論じ尽されていない点も多く、あらゆる面からの観察を必要とするが、本論に於ては一応現代の布教方法と云う点に注目してみたいので、足らざる所は後日に譲るとし、次に本章では聖人滅後の教団が、どのような伝道を実施して行ったかを探り、それが現代の上はどう影響し、又それを如何に活かしてゆくべきかを考察してみたい。

日蓮聖人滅後に於ける教団内の布教・伝道は、どのような形で発展して行ったのであろうか、と云う問題に就いて、「教団史」<sup>(1)</sup>を通してその伝道の推移を観察してみたいと思う。先ず、聖人の滅後直に本弟子六老僧等を中心として、各地に熱烈な布教・伝道がくりひろげられた。主なものを拾って見ると、日持師の海外伝道の先駆。日像師の帝都開教、或いは身延・中山・鎌倉等を中心にして、日向・日高・日朗・日祐等の諸師が、関東の教勢を興隆ならしめていったのである。これらの伝道は、宗祖の教の如く文字通り「不自惜身命」であった。即ち、門下に於ける宗教的実践が直に布教であり、伝道を意味していた時代である。こうして次第に繁栄した教団は、次の戦国時代に入り、その捨身な折伏伝道に対して、迫害の火の手が一層強くなり、天文・安土・慶長等の法難を受け、伝道史上の多難時代となった。此の頃の教団は主として他宗との問答・法論などに中心が置かれたようである。各自が活潑な弘経の念に

強力な信仰を持った八伝道本位の教団として、結束の力を以って多難をのりこえて来たのである。

然し、室町以降江戸時代に入ると、幕府は仏教に対して一応保護政策を施し、各教団共落付いた共存共栄の安定性を得て、与えられた「檀家制度」の枠内で、各自の隆昌を見るに至ったのである。此の頃の布教方法は他宗との問答よりも主として檀徒に対する教育に中心がおかれ、「法話」や「説教」が盛んとなり、当時の大衆をひきつけるに足るだけの研究・伝道技術がおこなわれたようである。即ち、「話術」の練磨が第一に挙げられる。難解な法門の解説ではなく、主としてわかりやすい八宗祖の伝記を通して、又は八経典物語を通しての伝道であった。いわゆる「語り物」であって、当時の大衆に流行していた歌舞伎・能・義太夫・常盤津或いは琵琶・講談・落語・浪曲等、こうしたものを大いに取り入れて参考とし、大衆を楽しませながら布教が実施されてゆく様になったのである。<sup>(3)</sup> 寺院は娯楽設備の少ない時代であっただけに、忽ち人々の心をとらえ、たくみに大衆の生活と密着した伝道が、そうした中から生れて行ったものと考えられる。イエス・キリストに音吐朗々と「御一代記」を語る「クリ弁」は、聴衆をして歓喜法悦の境に誘い入れ、全く大衆にマツチした布教方法であったと云えよう。だが、こうした「寺檀制度」の上に伽藍も増大した安定性の中で、次第に教化・伝道が専門化されるようになり、遂に一般の中から特定の伝道者が生れ、これが更に「布教師」と称されるようになって、益々専門化され分業化されて、独立的存在をたどるに至ったのである。本来、門下は全員が入信の当初より「求道者」であり「伝道者」でなくてはならないはずなのが、こうして「弁説」の上手な者のみが専門に布教を担当し、伝道を行うものの如くに考えられ、他の信徒らはその説教を聞いていればよいと云うような形に大勢が移って行ったものと考えられる。

即ち、檀家制度が出来上ると、幕府の権力に依るバックアップとあいまって、寺院僧侶の安泰が保証されて来た為

に、自然と各自に「寺檀」或いは「本末寺院」<sup>(4)</sup>の關係が明確となり、敢て伝道の必要性が従来程強く感じられなくなつて来たのである。つまり此の寺院保護の政策が、逆に各教団から伝道性を失い忘れさせる一つの大きな原因となつていったことになる。固定された制度の中からは、活きた伝道が次第に姿を消してゆき、一部の強い信をもつた伝道者以外の大部分は、檀徒に向つて高座から「説教」する形式となり、聴衆は聴聞するだけで事たれりとするようになっていったのである。又寺院自体に於ける本末の關係から、例えば御会式・法会等には本山から専門化した「布教師」を招き、説教を行わせると云う形式に変わつて行つた。即ち、「寺院」と「檀家」とは制度上での結び付きはもつていたのだが、人と人との宗教的結び付きは疎遠なものと化して行つたのである。ここでは既に前代のような身命をかけての伝道とか、新しい人間關係の結び付きとか云うことは、次第にうすれてゆき伝道が安泰の中で一種の娯樂性を強く持つようになり、更には説教が主として善男老女に対する娯樂としてのみ認められるような段階にまでなつて来たのである。

然し、これは前述せる如く、教団の伝道全体がこうであつたと云うのではない。一見して大体がこうした傾向であつたと云うのであり、勿論、眞の伝道があつたからこそ今日の教団が維持されているわけであるが、形の上から見ると、このような制度化された教団として、眞の意味での伝道及びその意義が軽く見られるようになって来たことは、否定出来ない事実と見ることが出来よう。

このようにして出来上つた専門の「布教師」による旧時代の伝道、一般に「古典説教」とよばれている「語り物調」や「くり弁調」の方法が、そのまゝ現代の布教方法の上に継承され影響を与えているのである。これは現代に活



きた布教方法を開拓してゆく上の基礎としては必要であるかも知れないが、そのままの型では、やゝ大衆性を欠くきらいが生じ、現代人に対し、迫力を欠いて来ているものと云えよう。

伝道史の一端を繕いて見たことに依り、既に明らかな如く、「仏教を弘めん人は必ず時を知るべし。」<sup>(5)</sup>と云う祖文の示す所に従って、現代には現代の人に即した△鑑機察時∨の伝道でなくてはならない。教団に於ける伝道の跡をふりかえってみたとき、旧時代の先師がそうであった如く、大衆性を持ち、豊富な材料を駆使して、大衆と共に、社会の中で活きた伝道を行うべく、常に布教・伝道の研修が、各自に於てなされるべきであると云えるであろう。

〔註〕

- (1) 『日蓮教団史概説』（影山堯雄教授著）参考。
- (2) 幕府は仏教擁護のため寛永十三年寺院に朱印・安堵状を与え、同十六年宗判改めの制を設け、「寺請け証文」が定められ事実上の戸籍管理権を持った。
- (3) 『新しい布教法』（佐藤智雄教授著）参照。
- (4) 日蓮教団に於ける本寺・末寺の關係は、古くからあったようであるが、寛永七―十三年頃に至って制度化が明確となった。
- (5) 昭和定本日蓮聖人遺文 二四二頁

## 五、現代に於ける教化とその方法

### A. 教化の基礎と問題点

布教伝道を今日の社会に於て如何に活かしてゆくべきか、と云う問題はしばしば耳にする処であるが、然しその具體的方法については、従来、あまり深い追求がなされていないものの如くである。古典説教に多少の新鮮味を加えて

これを伝承し、わずかに映画・スライド・印刷物等が、極く一部の布教者によって利用されている、と云う状態が既成教団の一般的姿として見受けられる。これに反して戦後俄に起った新興の各教団では、布教面に異状なまでの熱意を示し、入信者（会員）はその日から布教者として伝道の最先端に立って活動を開始しているのである。時に極端と思われる程の強力性を持っており、少数グループ制（班・組・支部）がしかれて団結力を持ち、然かもそれが全体として統一され固い組織を作っているのである。従って特定の「布教師」と呼ばれる者は存在しない。全員が布教師だからである。彼等の「信仰」についての善悪は一応別として見たとき、その布教活動には一種の真剣さが窺えるのである。此の真剣さが、現代に於ける布教伝道者にとって一つの問題点であるとさえ考えられる。

今日の社会にあって、日蓮聖人の流れをくむ者は、先ず聖人の教化伝道の態度に学ばなければならない。前述せる如く聖人の教化は不惜身命の「常説法教化」であり、献身的弘経の生涯であった。末法唱導の師として充分に足るだけの資格と自覚を得られ、「仏使」としての立場から教化されたのであって、その根底には不退の信があったのである。布教者の第一義は実に此の「信」にあると云えよう。即ち、門下の使命は「布教」にあり、布教の生命は「信」にある、と云うことになる。此の点を看過すると、布教伝道は単に技術のみの宣伝でしかありえない事になるであろう。布教者が教化する場合は如何なる時代、如何なる処に於ても、此の「不退の信」即ち色心二法にわたる「事信」<sup>(1)</sup>を基礎とするものでなくてはならないはずである。つまり「信仰をもち、教義に徹した人は、みな布教者であり伝道者でなければならぬ。」<sup>(2)</sup>と云うことであって、門下の多くが寺院経営者（住職）・布教師・宗学者・法要僧・社会事業家・教育者等と分業化されてしまうこと自体が、一見教団発展の如くみえていて、実は宗門の勢力をスポイルしている原因となっているのではなからうか、と考えられるのである。門下の全員が異体同心にして聖人の教化活動

に徹し、檀信徒が水魚の思いをなして伝道に協力したとき、真の布教目的が達せられるのである。

従来の「布教は専門の布教師に一任」と云う型の近代伝道からは、強力な教化活動は、ほとんど望めないと云つても敢て過言ではなからう。こうした所に現代布教々化の問題があるのであり、此の考え方を一新して、門下の布教伝道に対する古い枠から解放することが先決であると云えよう。旧時代の「説者」と云う「一对多型」のみにこだわらず、時に信仰の相談相手として「一对一型」の方式をも大いにとり入れ、「信仰指導者」として教化活動を進めて行く必要があるのであって、即ち、今後の布教活動者は、同時に信仰・生活両面での指導者とならなければならぬであろう。更にまた「仏教はその出発点から今日に至るまで、その究極の目的を八人づくり∨においている」と云うことが出来る。そこに説かれている世界観や人生観などの哲学理論も、すべてそれは人間を完成させる理論や実践としてのものである<sup>(3)</sup>と云われている点から見てもわかる如く、伝道者は人間教育・社会教育家としての要素も当然乍ら備えていなければならないであろう。

## B 教化の実践方法

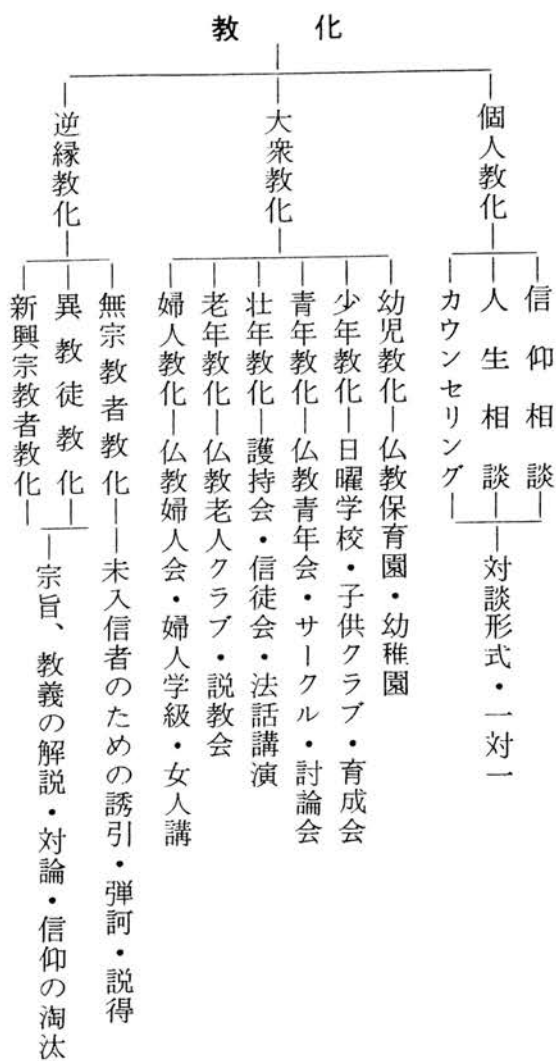
教化の第一義に於て「信」が不可欠の基礎となることは既に述べた通りであるが、現代の教化活動をより活潑に効果あらしめる上から、次に当然実践方法の上で技術が問題とされよう。即ち、教化活動の新しい在り方として、「多角化」されるのが先ず考えられて来るのである。従来の∧説教・法話∨のように、人々に向つて信・仰・注・ぎ・込・むと云う一方的な形ではなく、むしろ膝をつき合せて∧対談・話し合い∨の相談を通して、<sup>(4)</sup>逆に人々の中から信・仰・を・引き・出・し・て・ゆ・く、と云う形式が望ましいのではなからうか。此の場合、布教者はカウンセラーとなつて、一对一の対話をへて信仰問題、或いは人生の諸問題を相手と共に解決の糸口を見つけて行く努力を払うことである。真の教化伝道は

やはり落付いて一対一の対話の中から生れて来るものが多いのであって、一対多の説教、講演では、一時的感情の共鳴拍手がえられたとしても、心底からの信仰を喚起することは、やゝ困難なことと云わざるをえないであろう。

教化の多角化と云うのは、こうした意味から、一方的に型のはまった固定化した方法ではなしに、もっと自由な態度で、幾つもの階層にわかれ、△随宜如実説√されるべきであることを意味するものである。例えば、同じ法話をするにしても、一堂に老若男女を雑然と集め、一様に法話をして聞かせたのでは、「人を見て法を説いた」ことにはならない。青年と老年とでは物の考え方や宗教・信仰に対する要求が、大きくずれを持っている。老年に向く説教をすれば、当然のことながら青年達からは敬遠されてしまうことになる。そこで考えられることは、キリスト教の教会に於ける日曜礼拝などで採用している年齢及び性別に依って、幾回かにわけて法話をすることである。これは今まで一回で済んだ説教が幾回もくり返して、然かも対象者にマツチした表現方法で行うことになるのであるから、数倍の労力をわずらはすことになるのであるが、然し前にも述べた如く法華経に於て仏陀が上中下三根の相手にそれぞれ、「三周説法」を用いて説法教化せられている例から考えても判る如く、仏陀でさえ尚これだけの周到な方法がとられている点から見て、況んや現代の教化者が、こうした注意を払うのはむしろ当然と云わねばならないであろう。

次に、此の教化の方法あり方について、佐藤哲英教授の『教化学』を参考にしながら、更にわたくしの考えを述べてみたい。佐藤教授は、教化の方法を対告衆の側から大きく二分して、(一)個人教化と、(二)大衆教化とに分類している。此の中(二)の大衆教化を更に、(1)少年教化、(2)青年教化、(3)壮年教化、(4)老年教化、(5)婦人教化、の五種に分けている。わたくしは此の大別二分五種のほかに、「逆縁教化」の一項を加え、これを①無宗教者教化、②異教徒教化、③新興宗教者教化、の三種となし、更に(二)の大衆教化の最初へ「幼児教化」を加え、全体として教化を「三分九種」

にしてみた。



先ず、八個人教化 $\vee$ では、一対一の形式であって、相手の人生に対する不安・悩みを聞き、信仰に対する要求を知って、共に解決への道を求めてやる努力が必要である。即ち、人生・信仰の問題に関するよりよき助言者・相談相手となることである。

真の伝道は一人対一人の対決であり、伝道政策としてもこれはおそらく永遠の真理であろうと思われるのである。従って、信仰問題は各個人々々の問題なのであるから、個人教化が伝道の基本であることは、むしろ当然とも云えよう。前述の如く、日蓮聖人が千葉の富木・太田・曾谷の三氏に対し、或いは佐渡の阿仏房に向って、更に身延山中で

は弟子檀越に対し、それ／＼個人教化の手をさしのべておられたことから考えて見ても、また、御遺文中最も数の多い御消息文が、主として個人の教化を中心にされたものである点から考え、いかに個人教化が重要な意味を持っているものであるか、を現代再考すべきであると思う。華々しい街頭布教も勿論必要ではあるが、然し眞の教化は「一人対一人の対決」にあることも忘れてはならないであろう。例えば住職がカウンセラー（相談相手）となつて、積極的に出かけて行き、相談を必要とする人の問題を自己の問題として、共に語り合い励し合つて、その中から安心を一步／＼確立してゆくことが望ましいのではなからうか。こうした具体的方法のとられてゐる寺檀では、恐らく後に述べる新興宗教対策などと云う特別の方法はいらないことであらうと思われる。

次に、△大衆教化▽は主として一対多の形式によるものが多い。戦前から仏教保育所・仏教幼稚園はあつたが、戦後急激に増加し伽藍を利用して幼児の保育と教育が実施されている。人間としての基礎は五・六才頃までに一応性格付けられると云われている今日、幼児期に或る程度の仏教的情操教育の基礎を施すことは、爰に改めてその必要性を論ずるまでもなからう。又、小中高の児童生徒を対象とした日曜学校も最近各地の寺院で見られるようになって來ているがまだ保育園程ではないようである。仏教日曜学校の振るわない理由は種々あるであらうが、主として寺院経済の変動と保育事業への転換、及び教材の不足・組織の不完備、更に教団の無関心などが挙げられる。これに加えてテレビ・雑誌等の普及により刺激の強いものへ走つて、日校に興味を失つてゐる生徒達。此等の原因を一つ／＼掘り下げ、宗門自体としても統一を持つた日校の再出発に、力をかすべきであらう。教化による「人づくり」は先ず青少年の宗教的情操教育から始めるべきである。仏教保育と共に日曜学校も重要な仏教教化事業の一環であることを知らねばならない。また、寺院によっては仏教青年会が作られ、読書会や討論会等が催されてゐるようである。これも青



年教化には見のがせない問題と云えよう。グループ活動を生かし、「自分達の青年学級の」な性格として、自治的機構・民主的運営・新しい時代感覚をとり入れたフレッシュな内容・若人の創造性を伸ばすための留意、等が考えられねばならない。特に最近では音楽をとり入れて仏教讃歌を始め、多くの仏教的音楽が利用されて来つつあるようであるが、一層組織化されコースを通し、或いは音楽会を通しての教化が、今後益々必要となつて来るであろう。即ち八口から耳へVの単一的教化から、更に進んで視聴覚全般にわたつての多角的教化へ發展して行かなければならない。青少年の情操を、いかに仏教的ムードの中で育成してゆくか、がその教団の将来を左右する大きなカギとなるであろう。

こうした意味から、先ず寺院自体が青少年層に魅力を感じさせるよう、従来の教化活動を反省し、宗門全体が特に青少年教化対策に力を入れるべきであると思う。一国の将来はその国の青少年を見ることに依つて知ることが出来る、と云われている如く、教団の将来は、青少年教化がいかにかにうまく行われているか否かで知ることが出来る、と云うことも出来るであろう。青少年の教化活動がスムーズに進展している寺院では、壮年・老年及び婦人の教化も、これと関連して良好な成果を挙げることが出来るものと云える。又、次に八逆縁教化Vについて一見するに、無宗教者の多くは、宗教的無智から来る者であり、宗教に対して正当な理解を持たない者、或いは理解を得ようとしなない者達の間で、次第に宗教の必要性を否定する傾きが増して行くことである。自己の家庭に於ける宗教が何んであるのか全く知らない者も少なくない、と云う現状では、信仰の価値など全然知らないものであり、八宗教的無知↓迷信↓邪教Vと云うコースを辿ることにもなる。これは一つの教化伝道の隙間に生じた悪現象であつて、教化活動の不徹底さを物語っているものとも云えよう。「末法は逆縁のみ多くして、順縁は少なし」と云われているが、それだけに尚更伝道の手

をゆるめず、常に檀信徒の教化に当る一方、無縁の衆生をして多少なりとも下種結縁の機会を与えてゆかねばならぬ。無縁だからと云って放置してゆくことは、やがて全体を放置することにもなるのである。日蓮聖人が立教の当時は、「日蓮一人」であったのであり、無縁の大衆に教化の獅子吼が向けられたのである。「無縁」をして「有縁」たらしめるのが、教化伝道であるとも云えよう。

### C 伝道機材の工夫と活用

前述の多角的伝道と云う点から考えて、布教内容の向上・近代化及び技術の練磨と共に、手近かな機材を利用して効果を挙げる工夫も同時に必要である。費用が沢山あって設備も完備している所では心配ないが、若しそうでないとしても、それに代るべき手近の材料を工夫し利用することによって、必ずしも巨額の費用を要しないで済むことも出来る。

例えば音楽伝道にしても、最初からピアノ・オルガン等の購入が無理であるとしたなら、ハモニカ・笛・太鼓等を利用しての鼓笛隊をつくり、これをふるに活用して次の段階に入る準備を調べるとか、或いは又口頭布教をするにしても、スライドや黒板・図表等を利用して、御遺文の要点、法華経の大意、本尊の説明等をこれによって示し、印象付けることも効果的と考えられる。少なくとも口頭説教だけにたよる場合より、信者の「宗旨」に対する理解が多少なりとも深くなるものと思う。「掛図」に宗旨の要点を図示しておけば、携帯にも便利であるし、此の掛図一本を持参すれば何処で、いつでも説教が出来ることにもなる。檀家の月経廻りに紙芝居一組を持参して、法事後で宗祖の一代記を少しづつ解説してあるくと云うことも、地方寺院に於ては案外大きな効果を期待することが出来るかもしれない。又、葉書を利用しての「教箋」や、少し余裕のある所では、パンフレット・リフレット等の教化紙を配布し、門

前及び町角に掲示板などを立て、道行く人の足を少しでも寺へ向けさせる工夫が望ましい。

要するに、伝道の機材と云っても秀れた機材があれば、それにこした事はないのだが、各自の手近な材料を工夫しながら、アイデアを自己の伝道の上に活かしてゆくことである。つまり伝道には一定の型と云うものはない。高座にすわっている時、或いは讃仏歌を歌っている時だけが伝道ではないのであって、行住坐臥の宗教生活自体が伝道であり布教であってみれば、その伝道のテクニクも又自ずと工夫と活用の如何によって、豊富なものとなり得よう。説教には八念数と中啓▽があれば、それ以外の道具は不用と云うような固定した考えは、現代的でないばかりか伝道の効果をより以上のものに出ることが出来ないのではなからうか。

「信は莊嚴より起る」と云われている如く、法要儀式はすべて莊嚴の中に終始すべきであるが、然し、説法教化にあつては、必ずしも莊嚴によって一貫されなければならないと云うことはないであろう。現代に於ては形式伝道のみでは、もはや人々の心を真に把握することは困難になって来ているのである。元来、伝道自体は「形式」によって成立しているものでないことは前述の如くである。伝道者の信と熱意、それに布教技術がプラスされ、園中に於ても、林中にあつても、「即是道場」の教化が展開されるところに、真の意義と効果が挙げられるものと云えるであろう。

〔註〕

- (1) 『日蓮聖人の信について』拙著（『日本仏教学会年報』第二十七号）参照。
- (2) 佐藤智雄教授は『新しい布教法』の中で、布教者の資格について、「布教伝道は、信・仰・者・と・し・て、ことに宗教家として、だれにとつても一番重大な任務」であると論じている。
- (3) 水野弘元博士『仏教的人間練成の現代的意義』（「宗教」第八号）
- (4) 藤田清教授は『仏教とカウンセリング』の中で、「相談仏教は、縁起観から展開」されるものとして、カウンセリング即ち相談仏教の在り方を強調している。

## 六、むすび

斯くして、現代に於ける布教・伝道の理論と実際について、その一端を考察して来たのであるが、教化方法の具体例については幾多ユニークなものが実際に利用され工夫されていることと思う。然し本論では紙数の関係もあって、僅かに二三の例を挙げるにとどまってしまった。即ち始め、仏教に於ける教化伝道の起りと意義を探り、更に日蓮聖人の忍難教化の跡をたどりつゝ、伝道の在り方を考察し、それを基準として教団の伝道史を眺めながら、現代布教の実践方法についての一觀察を試みたのである。

元より本論によって、その総てが觀察し尽されたわけではないが、仏陀の大慈悲本願から発する救済の精神は、日蓮聖人に依って受つがれ、その献身的教化と忍難弘通の伝道は、本弟子以下の門下に依って持たれ、幾多先師の心血によって、今日にまでその流れを続けているのである。此の伝道の流れを辿ってみるとき、嘗って宗祖及び先師がそうであった如く、我々もまた大衆との人間関係に於て一層深い結びつきをもつた布教・伝道に徹することが急務と云わなければならないであろう。是に依り自ずと政治・経済・文化の全般に渡って教化の影響を与えることになるのである。

近来、既成の各教団に於ても、ようやく教化についての研究が熱を帯び、布教・伝道の方法について研修されるようになって来たが、教団本来の機能が「常説法教化」にある点から考えて、これはむしろ当然であり、また特に法華信仰者にとっては、唯一の義務であるとも云えよう。